機織りと村落開発
―マレーシア・サラワク州村落地におけるイバンの生業からの考察―

Weaving and Development:
A Study from the Livelihood of the Iban in Rural Sarawak, Malaysia

長谷川　悟郎
HASEGAWA Goro

Abstract

The purpose of this study is to examine hand weaving textile of the Iban in Sarawak State of Malaysia, its current stagnant situation of commercialization under the rural development program. For the purpose, their notions of livelihood should be understood in reference with the national development context and empirical field data.

Weaving used to be seen widely among the many native societies of Borneo that are made for ritual use, however the practice rapidly died after modernization. Out of those cultures, the Iban *pua kumbu* textile is today presenting one of the images of the ethnically diversifying flourishing Sarawak besides its image also circulates on the mass media for Malaysia national tourism that states their multiculturalism. The national media has given an impression that weaving is still today popularly practiced among the Iban, however the situation cannot be generalized. From the Iban's point of view, the situation of weaving is rather multifaceted, as it is seemingly dying, or still firmly persisted until the present day.

The paper attempts to look at contemporary socio-economic factors that are mostly important for their daily lives such as migration to towns as well as regular farming activities. Thereby, it may grasp the multifaceted situations and go beyond conventional representations of weaving that lead to understanding further the intermixing dynamic states of dying and developing.

The investigation of the study reveals that textile weaving is deeply embedded in their daily lives based primarily on farming, however only given low priority just as a pastime. This is creating the gap between the idea of commercialization and their reality. Further, the weaving process is not divided into phases but the whole process normally be carried by one weaver to produce their own works. This can be one of the obstacles for the industrialization.

The study recommends looking at weaving as embedded within their composite economy. That is, the means of livelihood in rural areas is in reality composed of a number of different activities. Considering this, it may be an unreasonable expectation of the government project to replace their rice farming for weaving. It does not accord with their common sense.

Keywords：Handloom weaving; Rural development; Swidden agriculture; Iban people; Malaysia Sarawak.
キーワード：機織り；村落開発；焼畑農耕；イバン人；マレーシア・サラワク州

Ⅰ．はじめに

本稿は、マレーシア・サラワク州の村落地域における農耕民イバン人の機織りについて、その商業開発のはかどらない状況を、国家の開発文脈および現地フィールドワークによる実証的データを照らし合わせ、彼らの生業観からの理解を試みる。

染織は、元来ボルネオ島の多くの在来民族の間で、とくに自分たちの日常生活における儀礼用の布づくりとしてひろく行なわれていたが、近代以降、多くが急速に衰退していった状況にある（cf. Gittinger 1979; Heppell 1989）。その中で、イバンのプア・クンブ*pua kumbu*とよばれる染織布は、公式に27種を数える民族集団からなるサラワク州の代表的な文化として表象され、さらに今日の多文化社会をうたうマレーシアツーリズムにおける様々な媒体にもその視覚イメージが流布する（Leigh 2000：46）[1]。そういった国家メディアの影響により、現在も機織りがイバンの間ではごく一般的に行われている印象をうけるが、実際にはそう一概に言いきれるものではない。機織りの現場では、むしろ衰退し消えゆくような、かつ現在に至って根強く残っているような多面的な状況がうかがえる。

本論では、そのような衰退と発展が混交するかのような機織りの実践について、人びとの生活のもっとも重要な農耕活動や今日的な町への移住など社会・経済的文脈に広く位置づけることで、国家の開発文脈にしたがった一枚岩的な表象をこえて多面的実態にせまりたい。染織という文化的営為を当事者らの生業観に位置づけて捉え直す試みは、これまでの民族誌研究では見えてこなかった染織および伝統文化に対する彼（女）らの取り組みと文化理念を理解することにつながる。

本研究は、おもに西欧人によって書かれた民族誌および現地の新聞記事等を参考文献とし、また筆者自身が2001年以来継続的に行なっている現地フィールドワークによる聞き取りデータを資料とする[2]。

1　イバン染織布は主に３種類にわかれるが、その中で経絣（たてかすりikat）技法によるプア・クンブはもっとも代表的なものといえる（Ong 1986; Gavin 1996; Heppell 2005; 長谷川 2007）。サラワク州でイバンは州人口の最多29.1％（60万3,000人）を占める。

2　現地フィールドワークは、2003年２月から12か月間のシブ市滞在と、2008年７月から11か月間カピット県カピット町およびバレー川の村落地滞在を実施した。またその他短期の訪問を散発的に実施し、長期滞在とあわせて、2001年から現在までの間にのべ２年半行なった。それぞれ支援下さった個人および組織に深く感謝する。

II．機織りの衰退と発展の混交状況

イバン染織がさかんな地域として、イバンの主要な居住地である沿岸のベトン県（*Daerah* Betong）と内陸のカピット県（*Daerah* Kapit）がこれまでとくに知られてきた。ベトンでは、当地でつくられていた技術の高い布が、19世紀半ば以降、英国人らによって多く蒐集されてきた。しかしベトンにおける機織りは、第二次世界大戦以後に衰退にむかい、1980年代には農業局など開発行政機関による復興支援がはかられたものの、今日にかけてほぼ衰退したといわれている。筆者が2003年に現地で行った聞き取り調査でも、機織りはもう行われていないとの見方が、多くのイバンや行政職員の間でほぼ通念化されていた。

また一方のカピット県は、人口約60,000人のうちイバンが８割を占めるもっともイバン色が強い地域とされ、商品開発が推奨される1980年代以前から、とくに技術的にすぐれたプア･クンブがつくられることが知られていた（Berma 1996：149）。また1980年代後半でも、カピット県のなかでももっとも後背地のバレー流域において染織は伝統的な社会威信をもとめる女性の重要な活動として根づよく行われ、さらに開発の流れにのりユネスコから国際的な賞を受賞するなどの例も出て、以来カピットはイバン伝統染織の代名詞ともなった（長谷川 2007）。

しかし農村の女性開発や観光開発などとからめて農業局主導によって推進される染織布の商品化事業は、今日にいたるまで小さな規模にとどまったままであり、一概に成功とも失敗ともどちらとも言いきれない。１枚のプア･クンブを織りあげるには最短でも１か月を要し、また織り手の技量センスによってまちまちだが、プア・クンブ１枚の売り値はおよそ５千円から３万円程度である[3]。またカピットではかつて1980～90年代は村落を訪れた欧米からの多くの観光客が値切ることもなく高値で買っていってくれたというが、観光客の減少した近年では、町の商店や農業局の一部門である「農協組織」（Farmers' Organization）が主な売り先であり、そこでは品質に対する選り好みが激しくまた値も大きくたたかれるという。現在カピットで著名な高い技術をもつ織り手は、政治家から直接に注文を絶えず受けるが、機織りを実際に日々行っているかといえばそうではなく、米づくりを生業の中心に据えて制作は片手間に行う程度である（長谷川 2007）。

この10年ほどの間に、カピットの村落地でも機織りの光景は徐々に見られなくなった印象をうけるが、当地域の30～40歳代以上のイバンの間では「イバンの女なら機織りは誰でもできる」と往々にして現在も語られるほど、機織りとは女性の社会規範として重んじられ、かつ極めて一

3　筆者の調査では、普段あまり眠れないと訴える老齢の女性が連夜夜通し機織りを行い１か月で織りあげることができると話した。しかし１年を通してみればせいぜい４枚程度である。また上木（2012）によれば、首都クアラルンプールにおける労働者の月額賃金は以下のようになっている。法定最低賃金RM900（約23,000円）、製造業ワーカー（一般工職）RM1,026（約26,300円）、製造業エンジニア（中堅技術者）RM2,902（約74,300円）、製造業中間管理職（課長クラス）RM5,744（約147,000円）、非製造業スタッフ（一般職）RM2,744（約70,200円）、非製造業マネージャー（課長クラス）RM6,448（約165,100円）、店舗スタッフ（アパレル）RM1,500（約38,400円）、店舗スタッフ（飲食）RM470（約12,000円）（出所：日本貿易振興機構JETRO「アジア・オセアニア主要都市・地域の投資関連コスト比較」）。しかしサラワクにおいては、これらの額よりも、幾分下がるものと思われる。また町近郊の農村女性が町の市場で野菜を販売すると１日で1,500～2,000円程稼ぐこともできるが、毎日販売することはない。

般的な営みであった。しかし今日ではイバン女性のすべてが行うわけではなく、また地域によっても、そして地域内においても、衰退と発展の状況は決して一枚岩的に捉えることはできず、様々なバリエーションが存在する。サラワクでもっとも染織が盛んと言われるカピットの中だけでも、彼らの記憶に照らせば、今日では機織りはあきらかに減少している。これはボルネオの多くの染織文化が衰退していったように、イバン染織もまた消えゆく伝統文化と見なされる現実と捉えることもできる（たとえばLeigh 2000）。

ただ伝統文化をめぐる衰退の言説は今に始まったものでもなく、20世紀初頭の英国人の記した民族誌のなかでも、イバンの伝統染織についてそういった状況が語られ（Howell 1912）、また社会が近代化にむかう1960年代以降では、イバン民族そのものさえ「消えゆく伝統に生きる人びと」として語られてきた（Jones 1966; Wright et al. 1972; Sutlive 1991）[4]。しかし現在にいたるまで、イバンはサラワク最大人口をほこる民族として発展をつづけている。これに従えば、伝統染織をただ消えゆくものと見なすのは的確ではない。

III．開発言説における村落住民像

本章では、現在のマレーシア国家およびサラワク州政府による開発言説について整理し、開発への積極的な参加が求められている村落住民像をみてゆく。

マレーシアは、1991年、マハティール当時首相が2020年までに先進工業国入りをはたすことを定めた21世紀を展望する社会経済開発構想「VISION2020」（*WAWASAN 2020*）を掲げ、近代・工業化への明確な目標を打ち出した。これは経済成長率７％維持といった具体的な経済目標とあわせて、マレーシア人の国民意識の形成といった多民族社会の統一を理念の骨格に据え、経済だけでなく、国民の精神的側面、文化、政治もふくめた社会の総合的開発計画となっている[5]。2020年にむけて、民族の統一、マレーシア民族の生成、公正な社会の構築、生活水準の向上、収入増加、所得分配、環境保護、政治の安定など広義の開発が目標とされている（cf. Rauf 1994; King and Parnwell 1999：162）。

経済発展だけでなく社会文化側面にも開発の重点がおかれるのは、マレーシア国家のアイデンティティの模索であり、そこではマレーシアの国および国民のありかたが問われている（Sani 1994）。たとえば、マハティール当時首相は、森林のなかで生活する在来民族に対しつぎのよう

4　たとえばライトらは、イバン人のしめるサラワク総人口の割合は1985年までに３分の１から４分の１に減少するといった人口学による予測をもとに、イバンの消え行く伝統社会を説明した。そこでは都市化や職の多様化、経済競合といった背景に華人がサラワク人口の４割をしめ、また多様な社会的プレッシャーから伝統社会にいきるイバンの人口は急速に減少し社会は衰退してゆくことが論じられている（Wright et al. 1972：152）。人口統計学者のジョーンズも同様に、人口調査が体系的に行なわれるようになったマレーシア国家成立以後、1960年にイバンは32%、華人は31％をしめたが、1985年にはイバンが25％に減少し、華人は40%に増加すると予測した（Jones 1966：170-171）。

5　経済成長率７％の維持により10年ごとにGDPは倍加し、2020年までに一人当り国民所得は先進国基準の$16,000となる。成長は1991年以来順調にすすんできたが、近年は成長率が７％を若干下回り、マハティール元首相はさらなる開発の必要を訴えている（Borneo Post 12/8/2006）。

に生活スタイルの変革をもとめる。「欧米のNGOは、マレーシア人のとくに在来民に対してジャングルのなかで生活しつづけることを望んでいる。動物のような生活を強いることで、生活水準向上のすべての機会が奪われている。しかし、今こそ我々自身が向上をもとめ、より良い生活をえるためにジャングルから出て自分たちの文化を変革しなければならない」（*Borneo Post* 10/8/96, cit.in King and Parnwell 1999：167）[6]。このように、開発を推進する国家は、森林のなかの生活に価値を認めることなく、住人に対し彼ら自身のよりよい生活、またひいては国の発展のための大胆な意識の変革をもとめる。

さらに、マレーシアと同様にサラワク州の発展もこれまで順調にすすんできたが、石油や木材など天然資源に大きく依存した経済の脆弱性が課題とされてきた（Hamid Bugo 1988：54-55）。そういった課題を抱えながら、サラワク州では、VISION 2020が発表される1991年よりも以前に、タイブ４代目州首相（Abdul Taib Mahmud）が、1981年の就任時に「開発のポリティクス」を掲げた。タイブは、この政策をサラワク州すべての住民が共有すべき理念と位置づけ、「我々は、なによりも共通の使命として開発を最優先課題と認識すべきである。そして経済、社会、文化、精神面において生活の変革を促し発展を実現させる。我々はけっしてパン（米食）だけでは生きていけない」とのべ、人びとの積極的な生活の変革向上をもとめた（cf. Rauf 1994：215）[7]。つまり「開発のポリティクス」では、住民自身が開発の主体として意識改革が問われ、それぞれに新たな知識とスキルを獲得してゆくことが望まれている。今現在こそが明日にむかう子どもたちの門出であり、そんな未来を先導する大人たちが、今の現実社会における変化と挑戦に応えてゆかねばならないのである（Rauf 1994：216）。

このように、差し迫った変革の時代が強調されるなかで、さらにVISION 2020の目標達成にむけてタイブ当時首相は「サラワク再生エネルギー回廊計画」（SCORE：Sarawak Corridor of Renewable Energy）を2008年２月に発表し、州内の数々の大規模開発プロジェクト計画をあきらかにした。この計画では、アルミニウムやニッケルの精錬、製鉄やガラス製造などエネルギー多消費型産業の展開をもくろみ、2020年までに6,200 MW（メガワット）の新たな電力供給源を立ち上げるとする。全体の８割を水力発電がまかない、その他２割を石炭による火力発電によってまかなう（*Borneo Post* 28/6/2011）。また州内の利用だけにとどまらず、半島マレーシアへ供給するために海底ケーブルの敷設も構想されている。2009年の州政府の公式資料では、28,000MW（水力発電だけで20,000MW）が計画されたが（*Borneo Post* 26/10/2008; Chang Ngee Hui 2009）、その後計画の見直しによって大幅な縮小がなされたようである。いずれにせよ、サラワク州の電力供給力である966MW（そのうち水力発電94MW）という現状をふまえれば、SCOREの大きさと開

6　1980年代以降、とくにマレーシアは、熱帯林の伐採反対をうったえる欧米の自然保護NGOによって厳しく非難されてきた。サラワク民族誌においても、開発政策と自然保護という世界規模の関心にしたがい、グローバリズムに侵害される森林とまたそこに住む人びとはまもるべきものとして捉えられてきた（たとえばホン 1989）。

7　その内容は、1991年の「VISION 2020」と互いに合致したものとなっている（Rauf 1994：215）。「パンだけでは生きていけない」は、英語の慣用表現 “man cannot live by bread alone” である。

発への強い信念を読みとることができる（*Borneo Post Online* 6/7/2011）[8]。

ところで、現在においてサラワク州は国内で開発に取り残された地域としてイメージが定着しているが、そのおもな理由の１つには、英国人ブルック家のサラワク王国統治時代（1846-1946年）に社会経済開発が蔑ろにされてきた点がこれまで指摘されてきた（cf. Pringle 1970）。それは２代目のチャールズ・ブルック（1868-1917年在位）が、海外の開発業者による土地や資源の搾取を懸念し、東南アジアの地域にひろくみられるようなプランテーション型開発を容認せず、住民の農業活動を小規模にとどめたことによるとされる。在来住民の慣習的土地権は、この時代に土地所有法のなかに成文化され、そこでは、１家族につき焼畑休閑地をふくめた100エーカーまでの土地保有と、土地保有者の子孫らにその権利が相続されることがみとめられた。ブルック３代目のヴァイナー期（1917-1946年）においては、開発にもようやく力が入れられたが、それでもサラワク州土の５分の１といわれる在来住民の慣習的土地権利が開発のまえに立ちはだかってきた（King 1990：163; Chew 1994：85; Sutlive and Sutlive（eds.）2001：933）[9]。

さらにサラワク州の開発を拒む主たる要因には、内陸地の複雑な地形と、人口分布のまばらさゆえにインフラ開発の効果が地域住民にひろく浸透しえない点を指摘することができる（Masing 1988：57; *Borneo Post* 26/10/2008）。サラワクは、1963年のマレーシアへの統合以来、医療福祉や教育分野における設備サービスの充実化において着実に発展してきたことは間違いない。しかし、それらは沿岸都市部に偏り、サービスへのアクセシビリティをめぐっては、内陸村落地域の住人らは経済発展の恩恵をうけることなく政治経済的に周縁化されてきたといってよい（Jawan 1993：99; Chew 1994：86）。イバン人らサラワクの村落地域の住民は、教育と社会施設へのアクセスや公務員への就職をもとめながらも、連邦政府が支持するイスラームにしたがったサラワク政治から疎外され、州内の木材伐採など開発プロジェクトがうみだす潤沢な利益から十分な恩恵を受けられず、また森林の破壊によって自分たちの生活が脅かされ貧困生活を強いられている（Avé and King 1986：114）。サラワク村落地の住民は、開発からつねに周縁化されてきたのである。

サラワク州の村落人口は、1980年のセンサスでは、対都市人口の比率が82対18となり圧倒的多数であることがわかる。とくにサラワク州のイバンにおいては、村落居住者の割合が、1947年の99.4%から1980年の95.0%と依然として高く維持されてきた（Masing 1988：57）。こういった現状をふまえても、マレーシアのとくにサラワクにおける開発の成否は村落開発にかかっているといってよい。

また現在サラワク州は、SCOREによって2030年までに150万人の新規雇用が見込まれるが、その内訳は、専門職および管理職３万人、工学技術職７万人、熟練工14万人、そして126万人が半

8　サラワクでは1998年に、バルイ川流域の15の村落（ロングハウス）の15,000人が移転を強いられ、69,500ヘクタールの土地にバクン・ダム建設が開始された。最大2,400MWの出力をもつバクン・ダムは、2011年８月に稼働している。州内ではさらに４か所でのダム建設が計画されている（Borneo Post Online 6/7/2011; 1/1/2012）。またべつの資料では、15,000人ではなく6,000人となっている（Masing 1988：65）。

9　イバン人の教育の機会と、政治経済への参画が自由化されていくのはヴァイナー期後半になってからであった（Sutlive 1972：379, 457）。

熟練・不熟練工となる。サラワク州地元での専門職および技術者の雇用増加を見込んで、今後教育機関の整備がもとめられている。一方では、正規の学校教育を受けてこなかった35歳以上（2008年現在）の年齢層は、開発によって今後うみだされてゆく新たな職業雇用機会に対応できないため、そういった住民たちのために農業開発が見込まれている。とくに科学技術と近代的経営法の導入による農業の推進が挙げられる（*Borneo Post* 26/10/2008）。

以上のように、現在マレーシアおよびサラワク州では、社会経済開発が強力に推し進められるなか、とくに村落地域の住民は開発への積極的な参加と意識改革がもとめられ、それまでの自分たちの生活を一変させる新たな挑戦に駆り立てられている。つまり、サラワク村落住民の小規模農業や自給経済における貧困への対処として、自らの意識改革と開発への積極的な参加がもとめられているといった言説が成り立つ。

Ⅳ．村落地の焼畑農耕と農業開発推進

つぎに、サラワク州の村落地域に居住する人びとにとってもっとも生業の中心であり続ける焼畑農耕と、それにまつわる農業開発の推進をみていきたい。

サラワクの内陸村落地が開発にとり残されてきた理由の一つには、すでにのべたように、地形の複雑さと人口分布のまばらさゆえにインフラ開発の効果が地域住民にひろく浸透しえない点など、地勢的な要因があげられてきた。たとえばマシンは、道路整備がすすまず、主たる移動を河川交通に依存した内陸村落居住者の市場へのアクセスの困難さについて具体的につぎのように説明する。インドネシア・カリマンタンとの内陸国境付近にある村落ロング・ジャウェLong Jaweでは、最寄りの市場があるブラガBelaga町まで、船等を利用して往復１人あたり150リンギット（およそ5,000円）がかかり、また自前の小船を利用すればガソリン代600リンギット（およそ２万円）を要する。しかし村で採取したゴムの240キログラム程度を町で換金しても280リンギット（およそ9,000円）にしかならない。このように、村落地の住民は、市場や行政との物理的距離によって各種開発プロジェクトや援助プログラムから遠のき、発展から確実にとり残されてゆく（Masing 1988：58）。程度の差はあれ、こういった孤立した村落居住者は、サラワク州人口の半数を占めながら、国による開発プロジェクトの割り当てがつねに低い程度にとどまる（Masing 1988：62; Wee Chong Hui 1999）。

国家開発の成否をにぎる村落開発だが、マレーシアは1957年の国家成立以後、国内のコメ自給率をあげることを目標とし、村落住民を自給農業への依存から脱却させるべく、より近代的な農業の推進に取り組んできた。サラワクにおいても1973年に正式にコメの自給自足政策が発表され、水田耕作のための水利灌漑設備や高収量品種が導入されてきたが、内陸地の住民のあいだでは本格的な商業的取り組みにはいたっていない（Solhee 1988：93）。とくにイバンの大半は村落地に居住し、陸稲を主作物とする自給を基本とした焼畑農耕をいとなむ。1960年代の統計では、イバン人の98％と、華人の２％、そしてマレー人の71％が陸稲を主作物とする農耕を生業とする（Jones 1966：157-158）。また1980年の統計では、サラワク労働人口の32％が稲作に従事

するが、GDPに対する貢献はわずか３％のみである（Solhee 1988：69, 99）。この数値が、サラワク農耕民の稲作がいかに自給型農業として小規模にとどまっているかを示しているであろう。

移動焼畑は、口語的英語において“slash-and-burn”（「森林を伐採して焼き払う」の意味）や、フランス語では「ノマド農法」などとよばれ、森林を使い捨て浪費するものとして、長らく軽蔑的に捉えられてきたものである（Cramb 2007：74ff.）。歴史を振り返ると、20世紀初頭、当時のブルック政府は移動焼畑民に土壌のより豊かな沿岸低地へと定住するよう促したが成功していない（Cramb 2007：126）[10]。そして英国の植民地社会調査の一環として行われた先駆的イバン研究においても、「イバンは森の蚕食者である」とのべられてきた（Freeman 1955）。さらに林業開発がサラワク州の急務の課題とされた1970年代からは、焼畑民は、伐採業者および政府にとって高価かつ貴重な熱帯林固有のメランチ材やラミン材などをかまうことなく切り倒して焼き払い、また後始末もせず森を荒廃させると厄介視されてきた（Avé and King 1986：27）。つまり、焼畑とは、収穫量が低いだけでなく、環境や土地の疲弊と劣化をまねく悪習的農法と見なされ、サラワクではそれに代える水田耕作への積極的な転換が促されてきたのである（Freeman 1955; Ridu 1994）[11]。

彼ら焼畑農耕民とは、開発にのりきれずにある犠牲者のようでもあり、またなぜ行政の期待に応えることもなく不便な土地に住みつづけ生産性の低い焼畑を基本とした生活をやめないのか。これは、商業的に儲かると行政担当者が説明する機織りになぜ取り組まないかという疑問とかさなる問いである。開発言説からだけでは、彼らの主体性はなかなか見えてこない。

本論以下では３つの村落を事例にあげて、焼畑農耕民イバンの生業観と機織りの取り組みについて、経験的データをもとに概観していきたい。最初にあげる事例は、ベトン県において機織りがかつて当地ではもっとも盛んに行なわれていた村だが、ここでは、サラワク州農業局の農業エコノミストとして1977～1983年にベトン県内の調査を行なったクラム（Cramb 1988）の資料をもとに、当村の商業的農業への取り組みをみてゆく。ただし当村の機織りにかんする具体的なデータはない。そしてカピット県の事例では、筆者の調査村を２つあげて農耕および機織りについてみていきたい。

Ⅴ．ベトン県スタンバック村におけるゴム商業栽培と焼畑の両立

すでにのべたように、ベトン県では現在機織りはほぼ衰退しているが、ここでみてゆくスタン

10 下流デルタ地域においては、伝統的に水稲（*padi raya*）も行われてきた（Pringle 1970：26 cit. in Cramb 2007：79）。ここで指摘できるのは、内陸地の住民が移動焼畑をすてて沿岸低地へ移り住むことがなかったという点である。

11 このように、とくに開発をめざす国家にとって移動焼畑に対する否定的見方は強化されてきたが、実際には土地を使い捨てるのではなく、休閑期を経て土壌の栄養分が回復したのちに再利用する正当な農法であったとして近年見直しもはかられてきた。たとえばクラムは、「低投入持続的地域密着型農法」（low input sustainable, community-based agro-forestry）であるとして、科学的な視点にもとづいてその農法の正当性を分析する（Cramb 1985; 1988; 2007）。ただし移動焼畑が環境に適合した農法であれ、人びとはなぜより高い収穫が得られると説明される水田を選ばないかという疑問への答えにはならない。

バック村は、地域の有力村としてかつて機織りが盛んで、また技術の高いプア・クンブをつくることで知られてきた。またこの村は、サラワク州内の他のイバン村落に先立って20世紀初頭にゴムの商業栽培に取り組んだ経緯を持つことでも知られている。

ゴム（パラゴムノキ：*Hevea brasiliensis*）は、サラワクでは、1902年にボルネオ会社（Borneo Company）によってはじめて商業栽培が行なわれたが、プランテーションが展開した半島マレーシアや東マレーシア・サバ州とは異なり、ヨーロッパ人による開発を拒みつづけたブルック政策のもとで、おおむね小規模農業としてとどまってきた。イバンによる商業栽培は、スタンバックにおいて、住民が1909年に着手し、８ヘクタールの土地に4,000株の苗を植えたことが初めてとなる（Cramb 1988：113）。ゴムの商業栽培は、その後地域周辺のイバンの間にひろまり、スタンバックでは苗を商業的に供給するようにもなっていった（Cramb 1988：113）。

ゴムは、栽培して８～12年の後に採取が可能となり、その後数十年のあいだ採取することができる。またやせた土地でも植えつけることができ、焼畑の休閑地を利用するなど手間がかからない。一方でコショウなどは、労働集約的な性質と、とくに病害虫対策において手間とコストが多大にかかるとされ、すでに19世紀後半にはベトンのイバンによって栽培されたが、ゴムほどには好まれることなく、イバンの間で一般的に広まるには至らなかったといわれている（Cramb 1988：121）。

スタンバックにおけるゴム栽培は、サワラクのイバンのなかでもっとも早く取り組まれ、商業規模に発展成功してきた。またそれによって、壮麗なロングハウス[12]の建造や祭宴の盛大な開催をはたし、イバン社会では傑出した威信を獲得してきたとされる。またイバンのあいだでもっとも早くキリスト教（英国国教会：アングリカン）を受け入れたことで、子どもの学校教育への参加を早期に果たし、その後イバン人では初のサラワク州首相を輩出するなど、多くの村出身者が政治やビジネスの分野で活躍している。ただしここで特筆すべき点は、たとえゴムで儲かることが分かってもそれを専業とする者はなく、商業的農業が発展しても焼畑稲作をけっしてやめることはなかったことである。しかし時代を経て、住民の町への転居が進んだ1960年代を境に、ベトンにおける農耕および機織りの衰退はすすんだと考えることができる。

スタンバック村の事例は、20世紀初頭のイバン人の状況だが、とくにこれまでのボルネオ民族誌において注目され、後の「ボルネオ在来民にとって稲作はもっとも重要な社会経済活動である」（Avé and King 1986：30）や、「イバンが所持するものでイネ（*padi*）はもっとも尊いものとされ家の繁栄と幸福安寧の源とされる」（Freeman 1970：50）など、稲作を不可欠とするイバンらの生業観の定説化を導いてきたのではないだろうか。これによって現在に至るまで、自給稲作を営む村落居住者の依然とした比率の高さとも相まって、人びとの米づくりを主とした一面的な

12 ロングハウスは、狩猟採集民をのぞく内陸在来民のほとんどが居住する、多家族同居型のボルネオ島固有の家屋様式である。建築構造は、一般的には75～150メートルの長さがあり、また700メートルに達するきわめて長大なものも1900年に報告されている（Rousseau 1990：104; Waterson 1990：60）。イバンのロングハウス（*rumah panjai*）では、基本的に一軒によって１つの村落共同体が形成されるが、階層性をもつ中央ボルネオのクニャKenya人やカヤンKayan人の社会では、いくつかのロングハウスが集合して１つの村落を形成することもある（Hose and McDougall 1993：vol.1. 203; King 1993：220; Sutlive 1972：353; 内堀 1994：182; Sather 1996：77）。

生業観が民族誌的に表象されてきたといえる。つまり、商業収益をもとめることはイバンの生業観とは相容れないゆえに、行政が儲かると推奨する様々な開発プロジェクトには関心を示さないという現在においても流布する一枚岩的説明とつながる。

Ⅵ．カピット県Ｌ村における町への転居と農耕ばなれ

つぎにカピット県の後背地にあるバレー川流域のＬ村を事例にあげ、近年地域内に広くみられる町への転居とそれにともなう農耕ばなれおよび機織りの衰退についてみていきたい。

カピット県の2005年の統計では、町と村落間の人口比率は24対76となり、現在も村落居住者が圧倒的に多い。またそれら村落居住者とは、ロングハウスに居住し、ほとんどが焼畑をいとなむ自給農耕民である（*Year Book of Statistics Sarawak* 2005）。

Ｌ村は、カピット町からバレー川を上流へ高速船で３時間半、およそ90kmの距離にある。県内では町からもっとも遠隔に位置する村落だが、これは20世紀初頭にサラワク王ラジャから信頼を受けてサラワク・イバンの最高首長トゥメンゴン*temenggong*を任命された首狩りの名士であったコーKoh（1870-1956）が、民族の境界を管轄するよう依頼をうけて居住した地である。当時は、コメの豊作を約束する原生林が無限にひろがり、そんな土地を貪欲にもとめたイバンにとっては最高の名誉であったといわれている。このトゥメンゴン・コーの政治力によって、村にはカピット県でははじめての公立小学校が1950年に開校され、それ以後、カピット県内のイバン社会では際立って早くから教育を修得し、エリート村として、多くの人材を政治やビジネス分野へ輩出してきた。また今日においても、カピット県内で機織りが盛んな１つの村としてひろく知られている。

筆者は、2003年以来、Ｌ村を短期滞在で何度か訪れてきたが、とくに2007年には住民のカピット町への転居が急速に進んでいたことを知った。これは国内経済の好況が一因にあるが、またＬ村にかぎらず、この10～15年ほどの間、カピットに広くみられる現象といってよい。ただ近年では、とくに好景気にわいた2007年あたりが１つの傾向にあったといえる。以下では、Ｌ村における住民の町への転居と、必然的ともいえる農耕離れおよび日常的実践としての機織りの衰退について、筆者の体験をもとに記述したい。

Ｌ村の村長は、かつて2005年の筆者の訪問の際に、彼の家（*bilek*）は毎年コメの収穫に恵まれ、村内でコメづくりに長けていることを誇りにして語っていた。コメづくりに長けることは、イバンにとって伝統的な美徳であり、高位の社会ステータスである「米を知る者」（*tau padi*）と呼ばれる[13]。ところが、筆者が2007年に再訪した際には、様々な状況の変化がみられ、村長の家ではもはや米づくりは行われていなかった。

状況の変化とは、第一に、2007年に一戸建ての家を町に建てたことである。村長は、村の近

13 *tau*は、‘able to’, ‘can do’, ‘knows how’, ‘may’ をしめす形容詞である（Sutlive and Sutlive 1994：264）。この霊的庇護のもとに獲得する特別な能力はセレガー*seregah*といい、イバンは、そうした能力を人生のなかで獲得してゆく者を尊敬の対象と見なした（Sather 1996：95）。

所にある木材伐採キャンプ地にて現場監督としての仕事を持ち、船外モーター付きの自家用ロングボートで毎日通勤しているために町へ移り住むことはできないが、夫人は１か月のうちほぼ半分を町の新家で過ごし、村と町を行き来するようになった。なぜ町に家を買ったのか訊ねたところ、４人の子どもの末子がついに村の小学校を卒業し町の中学校へ入ったのと、両親が老齢にて病院通いを強いられるので町に住むのが便利であるということ。そして、町で家を借りれば月300リンギット（およそ10,000円）もの家賃が掛かるため、むしろ買ったほうが安いと説明した[14]。米づくりはとくにそれまで両親が率先して担っていたが、２人がついに老齢により体力的限界にきたこと、また夫人は妹の ３歳の娘を預かり育てていることで手がまわらないなどの理由から農耕をやめていた。妹の娘を預かるというのは、妹夫婦がカピットの木材伐採キャンプ地に住み込みで働いており、砂ぼこりが多いなど環境の悪さを嫌って頼まれているという。そして夫人はこの３歳の姪子を連れて町と村を往来していた[15]。

また農耕ばなれについて、夫人はつぎのようにものべていた。すなわち、コメづくりには肥料や農薬などを買わねばならないことを考慮したら、今日ではベトナム産米を買うほうがむしろ安くて便利だとの理由である。カピット町での販売値をみると、サラワク産米は約 110円/kgと、ベトナム産米は約80円/kgだった[16]。

農耕をやめると、コメだけでなく、生鮮野菜も町での購入に頼ることになるが、町へはそれほど頻繁に行くわけではないので、必然的に普段の食事は野菜不足となる。魚は、木材伐採会社が上流域に進出してからは川が濁り、今日ではそれほど多くはとれない。また大きなものがとれた場合には町で販売し現金化する。イノシシ肉が地元での狩猟により時に豊富に出回り、米飯とイノシシ肉の塩漬けが多く食される。2007年に筆者もＬ村に１か月の滞在中、ほぼ毎食白飯とイノシシ肉を食べ、それ以外のおかずは一切ない日もかなりつづいた[17]。野菜を求めてみたところ、野菜づくりを行なう村の住民がときに余剰分を売ってくれるというが、滞在中は一度もその機会にめぐまれず、村内はあきらかに野菜の供給不足にあったといえる。

以上、Ｌ村の事例では、近年の経済の好況によって促された町への転居とそれにともなう農耕ばなれをみた。ここでは学校や病院など町のアメニティが米づくりをやめる大きな誘因となっているが、それは内陸カピットのイバン社会ではこの10～15年ほどの現象だといってよい。町へ転居した者は、村落地での米づくりに代えて賃金労働に就くようになる。彼らにとって、米づく

14 家（*bilek*）を完全に捨てることは「炉を捨てる」（*buai dapur*）と呼ばれるが、そうすることは比較的稀だといえる。カピット中の多くのイバンが同じような理由から町内に生活拠点を移すが、それはけっして村の家を捨てて移住をするのではない。なぜなら家財や畑地などがそこに残され、また休暇期には家族メンバーがもどる故郷となっているからであると説明される。

15 高速船の運賃は、大人が片道10リンギット（約330円）と決して安くはない。

16 ベトナム産米など安価なコメは風味においてはまったく異なる。イバンの農耕民は自分たちのつくるコメを最高と見なす。

17 ブッシュミートの売買は本来違法であるが、2009年当時、イノシシ肉は村においては８リンギット/kg程度（約240円）で売買されていた。一方カピット町の市場では15～16リンギットの値段で出回っていた。需要と供給のバランスによるが、25リンギット/kg（約800円）に高騰することもある。

りはもはや生命線とは見なされていない状況を示している[18]。

また機織りに関して、村長夫人は、これまで子どもの時から、村生活では農耕の合間に実母と一緒につねにつづけていたという。政治家が村へ訪問にくると、染織布だけでなくビーズ細工など伝統工芸品を多く買い込んでもらえるので、そういう機会にあわせて住民女性はみな制作に励んできたと語る。とくに布などは急につくることはできないので、つねに日ごろからつくりつづける必要があるという。ところが、町のほうの家では、妹家族も同居しており、村の住居と比較して圧倒的に空間がせまく、機織りには適した環境とは決していえない。実母は、寝込みがちな老夫のベッドのとなりで介護をする傍らに小さめの機で機織りを行なっていたが、夫人が機をひろげるほどのスペースはなかった。

Ⅶ．カピット県Ｅ村における水田の取り組みとキリスト教信仰

つぎにみるのは、カピット町からおよそ56㎞の距離に位置し、バレー川の支流河川を入ったところにあるＥ村である。支流河川では高速船はなく、ロングボートと呼ばれる自家用の船外機付き小舟で往来しなければならない。Ｌ村の事例でみたように、近年バレー流域のイバンの間でとくに町への転居が増えるなかで、Ｅ村内においても、1990年代の半ばあたりから町への転居者は増加し、筆者の2008年の調査では、77世帯（*bilek*）のうち10世帯が空き家の状態にあった。ただし完全な離村（*buai dapur*）は一世帯であった[19]。以下では、筆者が2008年９月から９か月滞在した経験から得た資料をもとに、とくに住民のキリスト教信仰との関連において農耕と機織りへの取り組みをみていきたい。

Ｅ村では、2009年現在、村長をはじめとする３世帯が行政の指導にしたがい水田耕作（*padi raya*）を手掛けている。しかし、その取り組みは村内全体に浸透するには至っていない。住民の１人は、当地が丘陵地ゆえに水田のための平地を開墾することは困難であると説明する。村長ら３世帯は、平坦な土地を所有し、それぞれ世帯単位の自給規模において水稲を10年来つづけている。焼畑と同様に小規模な自給稲作であるなら焼畑に代える利点は何であるかとの質問に対し、村長は、水田では灌漑を整備する必要はあるが焼畑のように毎年開墾する労力が省け、また急斜面での危険な作業もないと説明する。またさらに、水田はイバンの文化ではないため、焼畑サイクルにまつわる多くの儀礼活動が省けてよいとも話す。このイバン文化に対する否定的見解

18 町への転居には、上述した理由のほか、家族をささえる男たちの就労がある。とくに多いのが、カピットで木材伐採の仕事を経験した若者は、エキスパートとしてアフリカやロシア、パプアニューギニアなどの海外キャンプ地へ赴く。学歴をもたない村落地出身のイバンがもっとも高い給与がえられる仕事である。

19 Ｅ村では、町など遠隔に住むなどで家（*bilek*）を１か月以上離れた者は、帰郷時に再び炉をつかう際、村長に30リンギット（約1,000円）を支払うことが規定されていた。しかし、炉を使わないのなら30リンギットは支払わなくてよいが、炉は必ず１年に一度は火をいれなければならないとされていた。守らない場合も罰則金が科せられる。帰郷者は、大体６月の正月（ガワイ・ダヤック*gawai dayak*）または12月のクリスマスをえらんで帰郷する。同様に、クラムは、ビレックを長らくあけることは *"pemali chelap dapur"*（「炉を冷ますことの禁止」の意味）とし（Doveとの私信）、かつては月に最低２回は炉に火を入れることが規定されていたが（Richards 1963：57, cit. in Cramb 2007：332 n.13）、その後規定は緩和されているとのべる。しかし、村（ロングハウス）ごとにおいて規定（*adat*）は異なるというのが筆者の理解である。

は、村長ら３世帯が村内においてもっとも熱心なキリスト教メソジスト派の信者であることから説明できる。

サラワク在来民族の間では、ボルネオ福音教会（SIB：*Sidang Injil Borneo*）やローマカトリック教会、またイバンでは、先のベトン県など沿岸部における英国国教会（アングリカン）と、カピットではメソジスト教会などが普及している。カピットにおけるメソジストの活動は、ようやく1939年に始まるが、第二次世界大戦をはさみ、先のＬ村のサラワク・イバンの初代最高首長トゥメンゴン・コーらが、1949年に初めて入信するに至った[20]。Ｅ村では1979年に普及が始まっている。

メソジスト教会の特徴は、厳格な規則をもつボルネオ福音教会などと比べて、機織りをふくめた民族の慣習文化に対する許容範囲が広いことである。しかしそれでも、教会としてはキリスト教の精神にしたがうことをもとめるがゆえに、Ｅ村の村長をはじめ教会よりの住民の間では、神霊への供物をともなう農耕儀礼などを自ら開催することには消極的であったといえる[21]。

またキリスト教にしたがうこととは、教育や経済活動の優先を得るための政治的方策でもある（cf. Varney 2011：129-130）。現在州内の55％のイバンがキリスト教信仰者という状況においても、キリスト教入信とは社会的名声を獲得する１つの手段として広く捉えられているといってよい（Saunders 1995 cit. in Varney 2011：128, 137）。実際に、村長は住民のために町の農業局へ定期的に赴き、発電用の小規模ダムを裏山の渓流に建設してもらうよう話を持ち掛けている。また一方で、Ｅ村の住民の30歳の男は、キリスト教には寄付金をとられるだけで得がないと話す。

そしてキリスト教との関連において機織りとは、Ｅ村の村長は、日中にするものなら「怠惰な女の趣味活動」であると明言する。それは、キリスト教の理念に従えば、仕事とは、つまり汗を流して働くことであるからと主張する。村長自身も、村内ではとくにコメづくりに長けているように、村長夫人とともに積極的に農作に取り組んでいる。しかし農閑期に入る12月ころになると、村長が何を言おうと、夫人は頻繁に昼間にも隣近所の女性同士でおしゃべりをしながら機織りを楽しむ様子をみせていた。ただそれは経済活動としての取り組みではない。

以上、自給農業を営みつづけるＥ村の事例をみた。ここでの米づくりは、行政の指導とさらにキリスト教の倫理観にもそって取り組む水田稲作であるが、商業規模には至らずあくまでも自給レベルにとどまったものである。これは一枚岩的には捉えきれないイバンの生業活動の多様なあり方を示している。またそのようなイバンの米づくりに対する伝統的美徳観とキリスト教的な仕事観からは、決して彼（女）らの生業活動には従うことのない機織りのあり方が見えてくる。

20 晩年を迎えたコーの入信はただ単に政治的関心にしたがったとの見方もある（cf. Varney 2011：129-130）。

21 教会や行政の間では、民族の伝統信仰についていかに扱うべきかつねに議論されているが、とくに教会が非難する要素として、首狩りやシャマン療法、離婚、深酒、ギャンブルがあげられる。また霊への供物などは、それぞれ牧師によって意見が分かれる（Varney 2011：151-168）。またイバンのキリスト教信仰については、土着の多神信仰に融合したシンクレティズム様式と捉えるべきかもしれない。

Ⅷ. まとめ ―商業開発が期待される機織りの生業観からの理解

本論では、マレーシア・サラワク州の村落社会をとりまく開発言説と、村落居住のイバンが主たる生業として取り組む稲作の一端をみることにより、村落生活における機織りの社会・文化的位置づけを捉え直すよう試みた。

村落居住のイバン女性によって営まれてきた機織りは、1980年代から地域の産業振興や女性開発などの目的の下に商業開発がすすめられてきたが、一部ではユネスコから国際的な賞を受賞する例もあったものの、米づくりに代えて主たる稼業として取り組む者がなく、行政が求めるような産業としての発展には程遠い状況にある。

元来プア・クンブ染織布は、焼畑農耕サイクルにあわせた各種儀礼活動に用いられ、そういった機会に合わせて年に数枚程度がつくられるものであった。L村のようなある程度の規模をもつ村では、村を訪問する政治家が布を買い込むこともあったが、それはカピット県のイバン村落地を広く見渡せばごく例外的ケースである。ただし、このような政治家による取組みと支援がビジネスの芽として育たなかったという不可解な状況は、本研究の主たる関心と重なる点である。

そしてE村の事例からみたように、機織りは通常農閑期もしくは農耕を終えた夕刻にせいぜい行われ、ロングハウス居住における農耕活動のサイクルと密接な関係にあることがいえる。また整経などの製織の準備工程では、空間スペースに加えてロングハウス内の女性同士の協同が不可欠である。L村の事例から、町の個人の一軒家においては作業の困難さを容易にうかがい知ることができる[22]。つまり機織りは、村落地のロングハウスに居住する農耕民の生活様式に根差して培われてきたが、ただし生活上の優先度は総じて低いといってよい。

このように、農耕生活における機織りの位置づけが理解できたが、ではなぜ村落居住者のあいだで米づくりに代えて機織りを生業とする者が出ないのか。決してその答えは、行政が儲かると推奨するプロジェクトに関心を示さないからではない。また、商業収益をもとめることはイバンの生業観とは相容れないといった一枚岩的な説明でも理解することはできない。ここでは明確な答えなどはないが、理解の核心に近づくための２つの点をのべて本論をまとめたい。

１つは、機織りは、織り手個々人が糸の染めから織りまでほぼ一貫して遂行し生産性を求める工程間の分業はない。織り込む模様には、詩的な題名が付されるなど、農耕民の農作物とは違い、唯一無二の作品であり、またこれは産業化に立ちはだかる壁だといえる。筆者は、L村の村長夫人が所有する技術センスの高いある１枚のプア・クンブをぜひ売ってほしいと度々願ったことがあった。それを夫人は頑なに拒み続け、なぜ売ってくれないかとの問いに「売ったらなくなってしまうから」と答えた。彼女らの布づくりに対する考えを垣間見せる貴重な言葉である。政治家や外国人観光客など他人に売るものとは品質において区別していることがわかる。唯一無

22 ただし本論で示したL村の事例とは、筆者が参与観察した１家庭のケースであり、村に残る多くの住民のなかには機織りを続ける女性もいる。またE村で機織りを行なう女性とは、ロングハウス住民全体でわずか２～３％程度であり、それぞれ２例ともすべての住民女性にあてはまるものではない。

二の作品づくりとして、売るためにつくっているのではないことが明白となる[23]。

２つめは、彼ら農耕民が生業とする稲作とは、独自の複合型経済システムに組み込まれた農耕活動であるということ。そこでは稲作だけでなく、漁猟や狩猟、森林産物の採集、ゴムやコショウなどの換金作物栽培、そして出稼ぎなど就業労働を組み合わせた複合型経済によって成り立っており、そういった実態が近年注目されてきた[24]。つまり、村落社会の生業活動とは、生存経済と市場経済をまたぎながら、自分たちの生存領域の足場を完全に捨て去ることなく、豊富な市場機会を最大限に利用する、そういった複合的経済活動によって成り立っていると考えることができる（cf. Dove 2007）。機織りもまた同様に、複合型経済システムに組み込もうと考えるとき、農耕に代えて機織りに取り組んでもらうという期待は、イバンからすれば反常識的ですらある。それはまた、農村社会・文化の消滅を一枚岩的にうたってきた開発言説が見落としてきた視点ともいえるだろう[25]。

図１　ロングハウス通廊空間における機織り（絣り作業）の光景

図２　家宝とするプア・クンブを誇らしく見せる女性

23 模様の題名「タイトル」（Gavin 2003）について、拙著（Hasegawa 2015）を参照。

24 また焼畑稲作だけをみても複合的性質がみられる。それはコメだけでなく、タロイモ、サツマイモ、キャッサバ、トウモロコシ、ショウガ類など各種野菜の種も同時にまき、また畑の周辺に植えつけられる多くの果樹は休閑期も管理維持される（Avé and King 1986：30）。

25 村落社会、染織文化について、そういった相関的な関係性への視点に立つことを今後の研究ではとくに留意していきたい。

引用文献

上木 貴博 2012「マレーシア―イスラム18億人市場の扉」『日経ビジネス』2012年10月15日号，日経マグロウヒル社，82-85頁。

内堀 基光 1994「森の資源の獲得戦略とその象徴化」大塚柳太郎 編『資源への文化適応：自然との共存のエコロジー』雄山閣，171-194頁。

長谷川 悟郎 2007「クリシェをこえて－'首狩りの布' マレーシア・サラワク州イバン染織布プア・クンブの今日的展開」『南方文化』第34輯，49-70頁所収。

ホン, イブリン 1989『サラワクの先住民：消えゆく森に生きる』（北井一, 原後雄太訳）法政大学出版局。

Avé, Jan B. and King Victor T. 1986 *People of the Forest: Tradition and Change in Borneo.* Leiden, National Museum of Ethnology.

Berma, Madeline 1996 *The Commercialization of Handicraft Production among the Iban of Kapit Division in Sarawak, Malaysia: Constraints and Potential.* Ph.D. thesis, the University of Hull.

Chang Ngee Hui 2009 "High-Growth SMEs & Regional Development: The Sarawak Perspective State Planning Unit", Chief Minister's Department Sarawak.
（http://www.epu.gov.my/c/document_library/get_file?p_l_id=12577&folderId=44603&name=DLFE-3210.pdf）

Chew, Daniel 1994 "Social and Cultural Trends in Sarawak", *Sarawak Museum Journal,* Vol.XLVII. No.68（New Series）, pp.85-100.

Cramb, R. A. 1985 "The Importance of Secondary Crops in Iban Hill Rice Farming", *Sarawak Museum Journal,* No.55, pp.37-45.

――― 1988 "The Commercialisation of Iban Agriculture", in R.A. Cramb and R. H. W. Reece（eds.）, *Development in Sarawak: Historical and Contemporary Perspectives,* Melbourne: Centre of Southeast Asian Studies, Monash University, pp.105-134.

――― 2007 *Land and Longhouse: Agrarian Transformation in the Uplands of Sarawak.* Nordic Institute of Asian Studies, Copenhagen: NIAS Press.

Dove, Michael R. 2007 "Foreword", in Cramb, R. A., *Land and Longhouse: agrarian transformation in the uplands of Sarawak,* Nordic Institute of Asian Studies, Copenhagen: NIAS Press, pp. xi-xiv.

Freeman, J. Derek 1955 *Iban Agriculture: A Report on the Shifting Cultivation of Hill Rice by the Iban of Sarawak.* London: Her Majesty's Stationery Office.

――― 1970 *Report on the Iban of Sarawak.* London: Athlone Press.

Gavin, Traude 1996 *The Women's Warpath: Iban Ritual Fabrics from Borneo.* UCLA Fowler Museum Cultural History.

――― 2003 *Iban Ritual Textiles.* Leiden: KITLV Press.

Gittinger, Mattiebelle 1979 *Splendid Symbols: Textile and Tradition in Indonesia.* Washington D.C.: The Textile Museum.

Hamid Bugo 1988 "Economic Development since Independence: Performance and Prospects", in Cramb, R. A. and Reece, R. H. W.（eds.）, *Development in Sarawak: Historical and Contemporary Perspectives,* Victoria: Centre of Southeast Asian Studies, Monash University pp.49-55.

Hasegawa, Goro 2015 "label, title, and *juluk*: naming system for weaving designg of Iban ritual fabric", *Borneo*

Research Bulletin, vol. 46, Williamsburg, Virginia: Borneo Research Council. (in press)

Heppell, Michael 1989 "Whither Dayak Art?" *Sarawak Museum Journal,* Vol.XL, No.61（New Series）, pp.75-91.

Heppell, Michael, Limbang anak Melaka and Enyan anak Usen 2005 *Iban Art: sexual selection and severed heads.* Amsterdam: KIT Publishers.

Hose, Charles and McDougall William 1993（1912）*The Pagan Tribes of Borneo.* Singapore: Oxford University Press.

Howell, William 1912 "The Sea Dayak method of making thread from their home-grown cotton", *Sarawak Museum Journal,* Vol.1-2, pp.62-66.

Jawan, Jayum A. 1993 *The Iban Factor in Sarawak Politics.* University Pertanian Malaysia Press.

Jones, L. W. 1966 *The Population of Borneo: A Study of the Peoples of Sarawak, Sabah and Brunei.* London: Athlone Press.

King, Victor T. 1990 "Land Settlement Programmes in Sarawak: A Mistaken Strategy?" in King, V. T. and Parnwell, M. J. G.（eds.）, *Margins and Minorities: the Peripheral areas and Peoples of Malaysia.* Hull University Press.

——— 1993 *The People of Borneo.* Oxford: Blackwell.

King, Victor T. and Parnwell, Michael J. G. 1999 "Environmental Change, Local Responses, and the Notion of "Development" in *Sarawak' Rural Development and Social Science Research: Case Studies From Borneo,* Borneo Research Council, Inc. pp.159-191.

Leigh, Barbara 2000 *The Changing Face of Malaysian Crafts: Identity, Industry, and Ingenuity.* Oxford University Press.

Masing, James 1988 "The Role of Resettlement in Rural Development", in Cramb, R. A. and Reece, R. H. W.（eds.）, *Development in Sarawak: Historical and Contemporary Perspectives,* Victoria: Centre of Southeast Asian Studies, Monash University, pp.57-68.

Ong, Edric Liang Bin 1986 *Pua: Iban Weavings of Sarawak.* Kuching: Society Atelier Sarawak.

Pringle, Robert 1970 *Rajahs and Rebels: The Ibans of Sarawak under Brooke Rule, 1841-1941.* London: Macmillan.

Rauf, Abang Haji Abdul 1994 "Planning for Wawasan 2020" *Sarawak Museum Journal,* No.68, pp.191-221.

Richards, Anthony（Compiled）1997（1981）*An Iban-English Dictionary.* Fajar Bakti: Oxford University Press.

——— （ed.）1963 *Dayak Adat Law in the Second Division.* Kuching: Sarawak Government Printer.

Ridu, Robert Jacob 1994 "Social and Cultural Change: Trends among the Dayaks in Sarawak" *Sarawak Museum Journal,* No.68, pp.137-143.

Rousseau, Jérôme 1990 *Central Borneo: Ethnic Identity and Social Life in a Stratified Society.* Oxford: Clarendon Press.

Sani, Rustam A. 1994 "Aspirasi Socio-Budaya Bangsa Malaysia dari Perspektif Wawasan 2020", *Sarawak Museum Journal.* No.68, pp.165-179.

Sather, Clifford 1996 "All Threads Are White: Iban Egalitarianism Reconsidered" in Fox and Sather（eds.）, *Origins, ancestry and alliance: explorations in Austronesian ethnography,* Canberra: Dept. of Anthropology, Australian National University, pp.70-110.

Saunders, Graham 1995 "The Anglican Mission and the Brookes", in V. T. King and Horton A. V. M.（ed.）, *From Buckfast to Borneo,* Hull: University of Hull.

Solhee, Hatta 1988 "The Rice Self-Sufficiency policy: Its Implementation in Sarawak", in Cramb, R. A. and Reece,

R. H. W.（eds.）, *Development in Sarawak: Historical and Contemporary Perspectives,* Victoria: Centre of Southeast Asian Studies, Monash University, pp.69-103.

Steinmayer, Otto 1999 *Jalai Jako' Iban.* Kuching: Klasik Publishing House.

Sutlive, V. H. 1972 *From Longhouse to Pasar: Urbanization in Sarawak, East Malaysia.* Michigan: Ann Arbor, University Microfilms International.

——— 1991 "Preface", in Sutlive（ed.）, *Female and Male in Borneo: Contributions and Challenges to Gender Studies,* Williamsburg: Borneo Research Council, pp.vii-viii.

Sutlive, Vinson and Joanne Sutlive 1994 *Handy Reference Dictionary of Iban and English.* Kuching: Tun Jugah Foundation.

Sutlive, Vinson and Joanne Sutlive（eds.）2001 *The encyclopaedia of Iban studies: Iban history, society, and culture.* set v. 4. Kuching: Tun Jugah Foundation.

Varney, Peter 2011 "The Methodist Church in Sarawak and its Work among the Iban, 1939-1968", *Borneo Research Bulletin,* Vol. 42, Borneo Research Council, pp.127-171.

Waterson, Roxana 1990 *The Living House: an Anthropology of Architecture in South-East Asia.* Singapore; New York: Oxford University Press.

Wee Chong Hui 1999 "Sabah and Sarawak in the Malaysian Economy", in King, Victor T.（ed.）, *Rural Development and Social Science Research: Case Studies from Borneo,* Borneo Research Council Proceedings Series, Borneo Research Council, Inc, pp.93-139.

Wright, Leigh and Hedda Morrison, K. F. Wong 1972 *Vanishing World: The Ibans of Borneo.* New York: Weatherhill.

Yearbook of Statistics Sarawak 2005, November 2005, Department of Statistics Sarawak.

新聞記事

"Five million foreign workers by 2010?" August 12, 2006 *Borneo Post*.

"SCORE to push Sarawak towards industrialised state", October 26, 2008 *Borneo Post.Online* http://www.theborneopost.com/2011/06/28/sarawak-govt-plans-to-build-up-to-6200/（2012年８月13日アクセス）

"Bakun Hydroelectric Dam", July 6, 2011 *Borneo Post*.

"Bakun offers huge tourism potential", January 1, 2012 *Borneo Post Online.* http://www.theborneopost.com/2012/01/01/bakun-offers-huge-tourism-potential/（2012年８月13日アクセス）

図版出典

図１　2014年８月カピット県バレー流域村落地にて筆者撮影。
商業生産ではない、織り手個人の唯一無二の作品づくりとして、農耕作業の合間をぬって取り組む。

図２　2008年12月カピット県バレー流域村落地にて筆者撮影。
プア・クンブ染織布は、先祖伝来の家財として家に受け継がれ、日常の儀礼活動に用いられる。家宝級のプアは1970年代以降に西欧人の博物館関係者らに買いつくされたと言われていたが、じつはそうでもない。彼（女）らは売るものと売らないものを分別していることが筆者のこれまでの調査で分かってきた。